
ユクモ村のハンターさん

Falcons39

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ユクモ村のハンターさん

【Nコード】

N3722Y

【作者名】

Falcons39

【あらすじ】

モンスターハンターポータブル3rdを題材とした二次創作小説です。

クエスト 001 「ニートは引越してハンターになったそうです。」 (前書

初登校：じゃなくて、初投稿です。Falcons39というものです。ストーリーの展開を早くする為に若干チートっぽくなったりするかもしれませんが。書き溜めとかはあまりしてないうえに、書くのはあまり速くないので、続きが遅くなるかもですが、生暖かい目で見守って、感想をいただけると嬉しいです。

クエスト 001 「ニートは引越してハンターになったそうです。」

俺は今ユクモ村というところに向かっている。

もともとハンターになって、稼ぐのが夢で、念願のハンターになったのが1年前。

：が、どうも先輩ハンター達と馴染めずソロ狩りを続け、とうとう先月ギルドの上位ハンターと問題を起こし、ギルドから除名されてしまった。

そんなわけで実家に帰ってゴロゴロと現実逃避していたところ、ユクモ村に行ってハンターをやってる幼なじみのルカから、

「黒ちゃんへ

実家でニートやってるんならこっち来ない？

温泉に入ると気分転換になるだろうしさ

愛しの幼なじみルカ様より」

とメールが来たので、愛しのという部分は引っ掛かるが、することも無かった俺は行くことにした。

ちなみに、黒ちゃんというのは小さい頃の俺の愛称なんだが：さすがにいい歳してこれは恥ずかしいな。

会ったときに言っておこう。

と考え事をしてるうちに着いてしまったらしい。

「着いたぜ兄ちゃん、そーいやこの村は初めてかい？俺で良けりや案内するが」

行き先が一緒だからと車に乗せてくれたおっちゃんが知らせてくれた。

「……乗せてくれたのには感謝する。それじゃ」

とだけ言ってさっさと離れた。

親しげに話しかけてくる人だったため、めんどくさかったのだ。

こんなのが人付き合いがうまくいかない原因というのは分っちゃいるんだが……

とりあえず、ルカを探すところから始めるかな。

といっても、初めて来た場所だからよく分からないな…。

ひとまず、ルカにメールを送ってみる。

「着いた、どこに行けば？」

これだけで伝わるだろう。

返信はすぐだった。

「黒ちゃん、よく来たね〇（^▽^）〇

今から迎えに行くから、村の入り口で待っててね（はあと）」

謎のハート付きではあるが、どうやらここで待ってれば来てくれるらしいな。

……

それから数分後、久しぶりに会ったルカは無駄にハイテンションだった。

「さて、とりあえずギルド行こッ

いつまでもニートじゃ、まずいしね。」

え？聞いてない……

俺は向こうのギルドを追い出されたんだぞ！

そんな俺が簡単によそのギルドに入れてもらえるわけが無いだろ。

という意味を込めて

「無理だ。」

とだけ伝えたのだが、

「ちゃんと村長には話して推薦しといたからダイジョーブだよ」

というセリフとともに物凄い勢いでギルドまで連れていかれ、あっという間に俺の端末はユクモのギルドに登録されてしまった……

こうして、俺の新しいハンターとしての生活が始まったのだった。

……道理で働けとうるさい母さんが快く送り出してくれたわけだよ。

O r z

クエスト002 「まずは装備を整えましょう。」

さて、何がなんだか分からぬうちにユクモのギルド所属のハンターになってしまった。

村長さんに挨拶を済ませ、あてがわれた自室へ向かうと何故かルカがいた。

「あ、黒ちゃん遅いよ、れでいを待たせちゃだめなんだよ？」

……れでい？レディ？

ああ、ルカのことか

待たせる？

いやいやいや、何も聞いてないのに部屋で勝手に待ってたただけでは？

と思ったが口には出さず、

「何故ここに？」

と、気になったことだけを聞いておく。

「ルカはね、黒ちゃんの彼女さんなので、お部屋で待ってたんだよ？えへへ」

こう言われてしまつては、男として許すしかない。

…許すしかないのだが

気になったことを指摘しておく。

「いつのまに彼女に？」

「え？ いつだろ？」

いや、疑問系で返されても……
と思ってるうちに

「それはさておき、クエスト何か受けた？」

さておかれてしまった。俺としては大事なことだと思っただがな。
まあいつか後で確認すれば。

さて、クエストか…

村長にあいさつしてそのまま村長からのクエストを受けたんだっ
たな。

「ああ、一応『ロイヤルハニーの納品』というやつを受けてるが？」

「クマさんに見つからないようにハチミツとるやつかな？ だったら、
そこそこの武器にしかないとクマさんに会ったときが怖いよ。」

「クマさん？」

なんだか、ルカがクマさんというどぬいぐるみとかを指しているよ
うに聴こえるが、なんだろうか？

「んー、アオアシラっていうモンスターで大きさは中級くらい？
かな」

なるほど、雑魚ではないということか、しかしそれなりの装備とい

っても支給された古ユクモシリーズしかないぞ。強化しようにも素材がないし：

と思っていたら。

「どうせ前の装備とか持って来てないんでしょ？これあげるよ。」

といって双剣をくれた。支給品と変わらないようにみえるが、よくみると上位ハンター向けの真ユクモの双剣のようだ。

基本的に他のハンターから武器をもらうなどということはあり得ないのだが、ルカとの仲だし貰っておこう。

「でも、いいのかコレ見たところ上位装備みたいだが？」

「わたしはどうせ笛吹きさんだからさ、双剣あっても使わないんだよね。だから黒ちゃんに使ってもらおうかなって、迷惑だった？」

「いやそんなことは全くない、有難く使わせていただく。」

明らかに新品で使ったことが無さそうなものだったので持ってる理由が分からなかったが、有難く使わせてもらうことにした。

これ以後は防具だけなんだが：

俺はポリシーとして「当たらなければどうということはない」というところがあるので、正直見た目優先で決める。

支給されたユクモ系統の防具はそこそこ気に入ったので、しばらくはこのままでもいいだろう。

ルカもそれは解ってくれてるらしく、

「いっても無駄だとは思うけど、防具ちゃんとしたやつにしない？」

と軽く呆れつつ聞いてきたので、

「当たらなければどうということはないよ」

とポリシーをそのまま伝えておいた。

案の定、ルカはあっさりと諦めてくれた。

ルカがまだハンターになる前、俺が向こうのギルドにいた頃は「死んだらどうするの？」と、かなりうるさかったが。自分がハンターになって色々わかったのだろう。あまり煩く言わなくなった。ただ諦めただけかもしれないが。

そんなこんなで、一通り準備はできたので、そろそろ出撃するかな。

「じゃ、行ってくる」

ルカは少し寂しそうだったが、

「ん、帰ったら温泉行こうね？ここで留守番しとくから。」

と送り出してくれた。

そして気付く、

あれ元々は温泉に入りきたんじゃない？無かったっけか？俺。

クエスト002 「まずは装備を整えましょう。」（後書き）

遅くなりました、第二話です。時間かかった割には短いですが、すみません。

感想とか貰えると嬉しいです。内容の批判とかでも、参考になると思うのでお願いします。

クエスト003 「女ハンターがこんなに可愛いわけがない…はずです。」

さて、狩に出たのはいいんだが…

モンスターではなく、ハンターと遭遇してしまった。

というか、ハンターなのか？えらく可愛らしいが…

「あれ？お兄さん見ない顔だけど、新米さんかな？」

声をかけられてしまった。

どうしよう？

というか、なんか上から目線？

「いや、新米ではないが、今のギルドでのハンターランクは1だ。」

簡潔に事実だけを伝えてみる。

「ふえ？新米じゃないの？だってソレ初期装備…だよな？」

まあ、そうなるな…

説明した方がいいのかな？

「色々事情があつてな、別のギルドからこっちに移ったんだ。」

追い出されたことは言わないでおく。

「ふーん、そっか。あ、わたしはレイっていうんだけど、聞いたこ

とない？」

いきなり、自己紹介されてしまった。

しかし、レイ？

双剣使いでレイというと：

まさか「あの疾風の双刃か？

いや、伝説級の双剣使いがこんなに可愛いわけがない。」

「伝説？疾風の双刃っていう恥ずかしい二つ名はついてるけど？：
：っていうか、さらっと可愛いと言われちゃった？恥ずかしいな
：／／／」

ん？もしかして驚きのあまり考えてること漏れてた？

まずい、初対面の女の子に可愛いとか、ただのナンパ野郎じゃない
か：

ま、まあ、相手も満更でもないみたいだし気にしないでいっか。

「ノワールだ、よろしく」

相手が名乗ったのに、自分が名乗って無かったことに気づいたので
名乗っておく。

「あ、うん、ヨロシク。」

それっきりで会話が途切れてしまった。

うーん：

妙に気まずい。

と思ってたら、ジャギイが二匹ほど近づいてきていた。

抜刀と同時に鬼神化して、倒しておく。

さすが上位装備、二回当てたら死んじやった。

とか考えてると

レイが

「なんか、鬼神化なのに不思議なモーションだね？」

とおっしゃられた。

なんか変だったろうか？

「どの辺が？」

強者のアドバイスは聴くべきだろう。

「たぶん、スライド移動をしないせいかな？」

スライド移動？

と疑問に思ったのが伝わったのか

「あ、えっとスライド移動ってのは私が勝手に呼んでるだけなんだけど。鬼神化するとき、身体が軽くなるじゃん？それをいかしてさ、滑る感じで移動するの。って言ってわかるかな？」

「なるほど、わからん。」

「分かんないか……こんな感じだよ。」

と、実演してみせてくれた。
なんか滑ってた。

ちょっとやってみる。

ツルツとな

お、これはいいかもしれない。

「ありがとう、これは使えそうだ。」

素直に礼を言っておく。

「うん、それはいいんだけど。君、もしかして強い？」

へ？強い？そんなバカな

「そう見えるか？」

「うん、だって今の剣筋からもそんな感じがするし、スライド移動
教えてこんなあつという間に習得する人は少ないしさ。」

そうなのか？

なんかよく分からんが、褒められてることだし礼を言っておくか。

「そう強いつもりは無いが、レイさんに認めてもらえるのは光栄だ
な。」

「レイさん？なんか違和感あるな、レイでいいよ、こっちもノワー
ルって呼ぶからさ。ところでクエストの途中かな？私はもう帰るト

コなんだけど、終わってたらず一緒行かない？」

ふむ、非常に魅力的な誘いだ。

だかしかし、まだクエストが終わってない……
サクッと終わらせるか。

「ロイヤルハニーを納品するだけのクエストだから、ちょっと取ってくる。待っていてくれ。」

と、言うなり俺は駆け出した。

「あ、アオアシラ出るかもだから。気を付けてね……って聞こえてないな」

レイが何か言っていたようだが、先を急ぐことにした。

クエスト003 「女ハンターがこんなに可愛いわけがない…はずです。」 (後

だらだらと書いてますが、戦闘シーンがかけません…

迫力ある戦闘シーンが書けるようになりたいとがんばりますので、

ヨロシクお願いします。

クエスト004 「クマはハチミツが好きらしいです。」

ロイヤルハニーとやらを回収すればこのクエストは終わりらしいから、さっさと回収するかな。とか考えながら移動していたら前方に青くて大きい熊？のようなヤツが見えた。
どうやら、まだ気づかれてないようだ。

あれか？ルカの言ってた『くまさん』とやらは。

アオアシラっていう名前らしいが、今回のクエストは別にこいつを狩る必要性はない……いや、無かった。

どうも、ヤツが美味しそうに食べてるアレがロイヤルハニーのようだ。

回収にはヤツを追い払うしか無いようだ。

さっきゼロから習ったスライド移動とやらの練習がてらやってみるか。

とりあえず、セオリーとしてバックをとる。

強走薬を飲み干し、抜刀、鬼神化。

…とのんびり準備していたら
ブオン

という音とともにクマさんのお手々が目前に迫っていた。

慌ててスライド移動で回避、と同時に青熊のバックをとる。

すぐ、乱舞に移る。

乱舞は型通りに最後まで振ると、デカイ隙が出来るので、途中で回避モーションをとって乱舞というのが俺の中では基本のパターンだ。

ただ、スライド移動の方がより素早く攻撃に移れそうなので、試してみるか。

そんなことを考えつつ、地道にダメージを与え続ける。
常に後ろにいるからまだ一撃も喰らってない。

乱舞して滑る、乱舞して滑る、だけの簡単なお仕事を繰り返すうちにクマさんも大分弱って来たようだ。

で、そろそろスタミナが切れそうだし一発本気で叩き込んでみることにする。

ザシュッ！

なかなかイイ太刀筋だなと、自画自賛していたら、青熊はそのまま倒れてしまった。

一応、死んではないが少しやりすぎたか？

ふう、疲れた。

しかし、休憩してる暇はない。なにせレイを待たせてるからな。

というわけで、ロイヤルハニーだけを回収して、さっさとレイのところに走っていったのだった。

クエスト004 「クマはハチミツが好きらしいです。」（後書き）

時間かかる割には、話が進みません。

理由は参考にするためにゲームを起動すると……時間が吸い取られるんです。

あ、主人公がアオアシラを殺さなかったのは基本的にモンスターの生態系を崩したくないからです。細かいことはそのうち話の中で触れます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3722y/>

ユクモ村のハンターさん

2011年11月18日04時15分発行